

目次

鍵を差し込んでオートロックのドアを開けて中に入ると、ドアの向こう側に隠れていた蟬が狂ったように騒ぎ立てて私は思わず小さな悲鳴をあげる。私の可愛い悲鳴は誰にも届くことがなくエントランスに吸い込まれていく。蟬だけがジジジジッと音を立てる。私は床でひっくり返る蟬をまたいで郵便受けを覗く勇気も出ずにそのままエレベーターへと向かう。4階で降り、廊下にヒールの足音を遠慮がちに響かせながら部屋へ足向ける。街を歩くときはあんなにも私を演出してくれるかのようなヒールの音も、ここでは少しだけ迷惑に感じられてしまう。そんな風に思うようになったのはいつからだっただろう。誰もいない部屋に向かって「ただいま」を言うのをやめたのは、一人暮らしを始めて1年も経たない頃だった。働き始めるタイミングで大学まで育った街を離れ東京が始まった一人暮らし。もう、10年にもなる。予定よりも5年ほど、一人暮らしの期間が長く続いている。本当なら今頃は寝かしつけた子供と一緒に夫の帰りを待っている生活を送っているはずだったのに。30平米もないほどの1Kは、2人で暮らすには小さすぎるけど1人で暮らすにはちょっと広い。ポットに水を入れてスイッチを入れ、買ったコンビニ弁当をレンジに入れてボタンを押す。スーツを脱ぎ、部屋着に着替え、コンタクトを外し、髪の毛をヘアバンドでまとめる。レンジから弁当を取り出してローテーブルに運ぶ。割り箸を取り出した袋をくしゃくしゃにまとめて床に放り投げる。インスタントの味噌汁をお椀に入れてポットからお湯を注ぐ。冷蔵庫から取り出した発泡酒とお椀を持ってローテーブルの前に座る。

右手でリモコンをいじってテレビの電源を入れ左手で化粧落としシートの蓋を開けて1枚取り出す。チャンネルをザッピングしながらシートで顔を拭く。雑談がてら夕方に後輩とトイレに連れ立って化粧を直すのをやめればこんなに丁寧に拭かなくても済むんじゃないかなと思いはじめたのは最近だ。それにきっと28歳で婚約者のいる後輩だって別に私と化粧直しをすることに意義なんて見出してないだろう。テレビに映る若くて可愛い女の子たちを見ながら私はネガティブな思考に陥っていく。化粧落としをゴミ箱に捨て、弁当の蓋を開けて発泡酒のプルトップも開ける。付け合わせのポテトサラダを一口食べてからお酒に口をつけ、ため息をつく。20時ちょっと前、きっと私は今日もいつもと同じようにグダグダと飲み続けるんだらう。ぼんやりと画面を眺めながら1本目を空にする。回り始めるアルコールは私を世界からほんのちょっとだけ、隔離してくれる。

32歳、独身。28歳まではあらゆる選択肢が広がっていた。医者、弁護士、商社マン、高収入と呼ばれる男性を狙っての合コン、合コン、合コン。いつだって私が選ぶ立場だった。あれが狂ったのは明確に29歳を超えてからだったな、とテレビに映る不細工な芸人を見ながら思い返す。最近こんなことばかり思ってるな自分。いつの間にか選ばれる立場に回り、高収入と呼ばれる男性からは見向きもされなくなり、気づけば合コンですらお声がかからない。鏡に映る自分や、帰りの電車で窓ガラスに映る自分を見てもまだまだ綺麗だ大丈夫と思いつつ、少しずつ化粧が手抜きになり、目尻をはじめとするシワに気づかないフリをするようになっている。結婚なんてハナから選択肢にないわ、っ

てスタンスの女性をずっと「負け犬の遠吠え」と笑っていたけれどこの歳になってみると彼女たちの方が私よりよほどイイ女に見えるなどという事も、気づかないフリをしていることの一つ。

冷蔵庫から持ってきた2本目を飲みながらお弁当のおかずをつまむ。美味しくはないけど不味くもない弁当と発泡酒で胃を満たしつつ不細工な芸人のくだらない話を聞いているといつの間にかおかずはなくなっていた。最初から食べる気のない白米をそのままにして弁当に蓋をする。美味しくはないけど不味くもないから、もったいないようでももったいなくもない。何気なくスマートフォンを手取るが、着信もメールもラインもない。21時と画面に表示するスマートフォンに充電ケーブルを挿し、ソファに放り投げる。トイレに立つついでに弁当と空き缶をシンクに置いていく。部屋に戻り、3本目に口をつけてハンドバッグから電子タバコを取り出す。2本開けてトイレに行き、3本目を開けると同時にその日帰ってから初めてのタバコを口にする。毎日同じ、ルーティン。変化に乏しいからこそその安定感と、安心感と、焦燥感と、不安。何で構成されているかわからない煙だか湯気だかよくわからないものを吐き出す。きっとこれは具現化された、ため息なんだろう。

気付いたらテレビは激しい砂嵐を中継していた。床から起き上がり、缶に半分くらい残っている酒を一気に飲み干してタバコの電源を入れる。ため息を吐き出しながら、テレビを消し、タバコ片手に空き缶をシンクに置く。シンクに寄りかかりながら「何してるんだろ」とそっと呟いてみる。毎日毎日、何やっているんだろ。ふと視界に食べ残した白米が目に入る。何しているかという問いへの答えは誰よりも自分がよくわかっている。何もしてないんだ、私は。毎日毎日こうして酒を飲みタバコを吸うたた寝して2時頃に目が覚めてトイレに行って、歯磨きして、寝て、朝シャワーを浴びて化粧をしてヒールの音を高らかに鳴らしながら出勤して、それとなく働いて、退社して、近所のコンビニで弁当を買って、繰り返した。何もしてないんだ、私は。私は何もしてない。

泣くな、と私は自分に言い聞かせる。泣いたって何もならないからじゃない。泣いたって、何したってこれが私の人生なんだ。泣くのは、来年になってからでいい。きっと、来年だって私はそう思っているんだろけど。少なくともここでさめざめ泣いてしまったら、睡眠時間が減ってしまう。

私は電源の切れたタバコを右手に持ちながらそっと呟く。

「馬鹿みたい」

「馬鹿みたい」

馬鹿みたい

著 sanukisoba

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
